

秋田のなまはげ

板橋区立志村第四中学校2年 やまもと 山本 けんた 健太

私の父は秋田県出身だ。秋田市に祖父母が住んでいるので、長い休みになると遊びに行くのがとても楽しみである。幼い頃は楽しみな反面少し不安な事もあった。というのは、秋田では悪い子はなまはげがきて山へ連れて行ってしまおうという古くからの言い伝えがあるからだ。中学生になった今はさすがにそんな不安はない。いったいなまはげとは何なのか？鬼なのか？今年の夏休みも秋田にきているのでその由来や民俗行事について調べてみたいと思う。

まず、県北大館出身の祖父に聞いてみたところ、幼い頃、家になまはげが訪れることはなかったそうだ。県南横手出身の祖母に聞いても同じ答えだった。一般的には秋田イコールなまはげのイメージが定着しているが、そうではなく秋田県男鹿半島だけの民俗行事ということが分かった。

どんな行事かというと、大晦日に派手な鬼の面を被り、蓑を着け、出刃包丁（もちろん模造品）を持って、ウォーと吠えまくりながら各家庭へと乱入する。家の中でなまはげは「なぐごいねが、えればおやまさつれてえぐど（悪い子はいねえか、いればお山に連れていってしまうぞ）」と言いながら隠れている子供を捜して部屋中を歩き回る。当然子供達はパニック状態で泣き叫ぶが、なまはげはお構いなしで見つけ次第子供の尻をつねる。頃合いを見計らい、家の主人がなまはげに酒をふるまい、ご機嫌を取り、子供が「良い子になる！」と約束すると、酒を一気に飲み干し、来たときと同じようにけたたましい叫び声を上げて去っていくというものだ。

なまはげに扮するのは各地区の青年有志だ。近年彼らは依頼があれば県内の色々な場所へ出張している。各家庭にはもちろん正月になると、祖父母宅近所のイオンモールで太鼓をたたき、盛り上げているのを見たことがある。赤ちゃんや幼児が大泣きしていた。こうして、男鹿半島での民俗行事が秋田全体のイベントとして広まっている事が分かった。又、秋田県の子供の学力が全国一位というのも、幼い頃からなまはげとの約束が影響しているのかな？とも思う。

次に、なまはげの正体について調べてみた。さまざまな説があるが、その中には「山の神」説がある。男鹿半島の本山・真山を中心として、そこから山神（さんじん）としてのなまはげが降りてくるとしている。それをオニと称している部落もあるそうだ。他に「武帝」説がある。およそ二千年も昔、漢の武帝が5匹のコウモリを連れて男鹿にやってきて、コウモリを5匹の鬼に姿を変え、家来として使ったが、1年に1度正月を休みにすると鬼たちは大喜びして里へ降り、大暴れをして帰っていったと言われている。

なまはげを見聞し、記録に残した最初の人は菅江真澄（江戸中期の紀行家）であり、菅江『遊覧記』からなまはげの記述を見だし、小正月の訪問者の一事例として位置づけたのは柳田国男だった。その後、日本民俗学者の折口信夫がなまはげを「マレビト」として規定した。「マレビト」とは折口によって考えだされた概念であり、簡単にいえば「特定の共同体のために遠方から時を決めてやって来て祝福と繁栄をもたらす来訪神」を意味している。来訪神が登場する行事や祭りはなまはげだけではない。沖縄石垣島の「マコンガナシ」、兵庫県淡路島の「ヤマドッサン」、鹿児島県薩摩郡の「トシドシ」などが有名であり、他にも70以上もの例があることがわかった。

男鹿の人々にとってなまはげは怠け心を戒め、無病息災・田畑の実り・山の幸・海の幸をもたらす、年の節目にやってくる来訪神。後継者不足などで年々行方不明の地区は減っていたが、近年復活の動きを見せているという。

最後に、部外者がその習俗に出会うことは困難である為、なまはげ行事の文化やしきたりが学べ

たり、衣装を身につけたりできるなまはげ館や、大晦日のなまはげ行事を間近で体感できる男鹿真山伝承館を訪れると、歴史的なパワーを感じることができると思う。

十条富士塚と富士山信仰

浦和明の星女子中学校1年 ^{かわち}河内 ^{すずか}涼香

毎年、6月30日と7月1日に「おふじさん」というお祭りが行われる十条富士神社には、「祝世界文化遺産登録 山岳信仰浅間神社 富士山 十條富士講」と書かれた横断幕がかかっている。私は前から十条富士神社は富士山とどんな関係があるのだろうと思っていた。学校の夏休みの宿題で、自分の住んでいる地域について調べる課題が出たので、十条富士神社と富士山の間関係を調べることにした。

最初に、北区飛鳥山博物館に行って、十条富士神社について質問したところ、十条富士神社をよく知っている博物館員さんがいることを知った。勤務日が不定期なので電話をするように言われた。後日、田中さんという方に電話でインタビューをさせていただいた。十条富士神社と富士山の間関係について聞くと、江戸時代に富士講という富士山を信仰するグループができた。それが広がって、富士山が見えるところに浅間神社（せんげんじんじゃ）が作られ、そこから富士山を拝んだ。十条富士神社は富士山を信仰する神社だと教えてくださった。十条富士神社はもともと古墳で、昔から十条に住んでいる人の話によると、十条富士神社から富士山が見えたそうだ。

それから、北区中央図書館に行った時に、「北区の部屋」という資料室があったので、その質問箱に質問を書いて入れたところ、図書館の方が回答してくださった。「昔は富士山に登るのは容易ではなかったと聞いたことがあるのですが、富士山に登るのに大体どのくらいの費用・日数がかかったのですか」という質問に、昔の富士登山は、多くの費用と時間を必要としたこと、そのため、村人たちはお金を出しあって代表者が登山したこと、富士参拝には約10日間かかっていたことを教えてくださった。『富士山文化 その信仰遺跡を歩く』という本によると、女性は二合目より先の山内には立ち入れなかった。そのような富士山に行けない人たちのために富士塚は作られたという。女性差別だと思った。

また、『富士山文化 その信仰遺跡を歩く』p.54には、「富士塚の三条件」が書かれていた。要約する。

条件1. 富士講徒が資金を出し合って築造した塚であること。あるいは、自然の山や古墳をもとに富士講徒が加工していること。

条件2. 葛折り（つづらおり）の「登山道」と「合目石」を設けていること。

条件3. 以下の要素を設けていること。

- ・頂上に「奥宮」の社殿、もしくは「祠」がある。
- ・中腹（五合目）、向かって右側に「小御嶽」がある。
- ・中腹よりやや上部（七合五勺）、向かって左側に食行身祿（じきぎょうみろく）入定の「烏帽子岩（えぼしいわ）」がある。
- ・麓の向かって右側に「お胎内（たいない）」がある。

これを読んで、十条富士神社の十条富士塚を実地調査し、この三条件が当てはまるか、石碑や祠を実際に見て確認しようと考えた。『十条富士講調査報告書』p.65～117を参考にして、地図を書いて、石碑と祠を確認した（資料1）。

十条富士塚にあったものと本の「富士塚の三条件」をくらべて、次のことがわかった。

条件1：十条富士塚は、もともとは古墳であった（田中さんと図書館の人の話からわかる）。

条件2：今はまっすぐの階段であるが、正面右側には、葛折りの「登山道」の跡がある。

「合目石」がある（小御嶽(こみたけ)=五合目、烏帽子岩(えぼしいわ)=七合五勺を表す）。

条件3：以下の要素を設けていること。

- ・頂上に「祠」がある。
- ・「小御嶽」がある。中腹（五合目）と向かって右側という場所もあっている。
- ・「烏帽子岩」がある。中腹よりやや上部はあっているが、十条富士塚は階段の右側にある。昔は階段の右側に登山道があったと言われていたので、そこから見たら、左側と言えるのではないか。

しかし、条件3の4つ目の「お胎内」は十条富士塚にはなかった。『十条富士講調査報告書』にも書いていなかった。

『富士講と富士塚』p.59には「第二次大戦中にこの塚に防空壕を掘ったためか、山が崩れたと言われ、現在は全面はコンクリートで覆い、南側斜面から後側斜面にかけては土の崩れを防ぐため、コンクリート板を上から下にかけて縦に並べて土留（どどめ）としている。」と書いてあったので、もしかしたら、防空壕はお胎内だったかもしれないと思った。

今まで、ただ石がたくさんあるだけの神社だと思っていた場所が200年以上もの歴史をもっていて、さらに、東京で5番目に作られた富士塚であることを知った。私は富士山が見えると「今日はラッキー」と思うが、それも富士山信仰とつながっていると思った。

- 参考文献** 有坂蓉子 『富士塚ゆる散歩』 講談社 2012年
竹谷靱負 『富士山文化 その信仰遺跡を歩く』 祥伝社 2013年
東京都北区教育委員会社会教育課 『十条富士講調査報告書』 2001年
日本常民文化研究所編 『富士講と富士塚—東京・神奈川—』 1978年（1993年復刻）

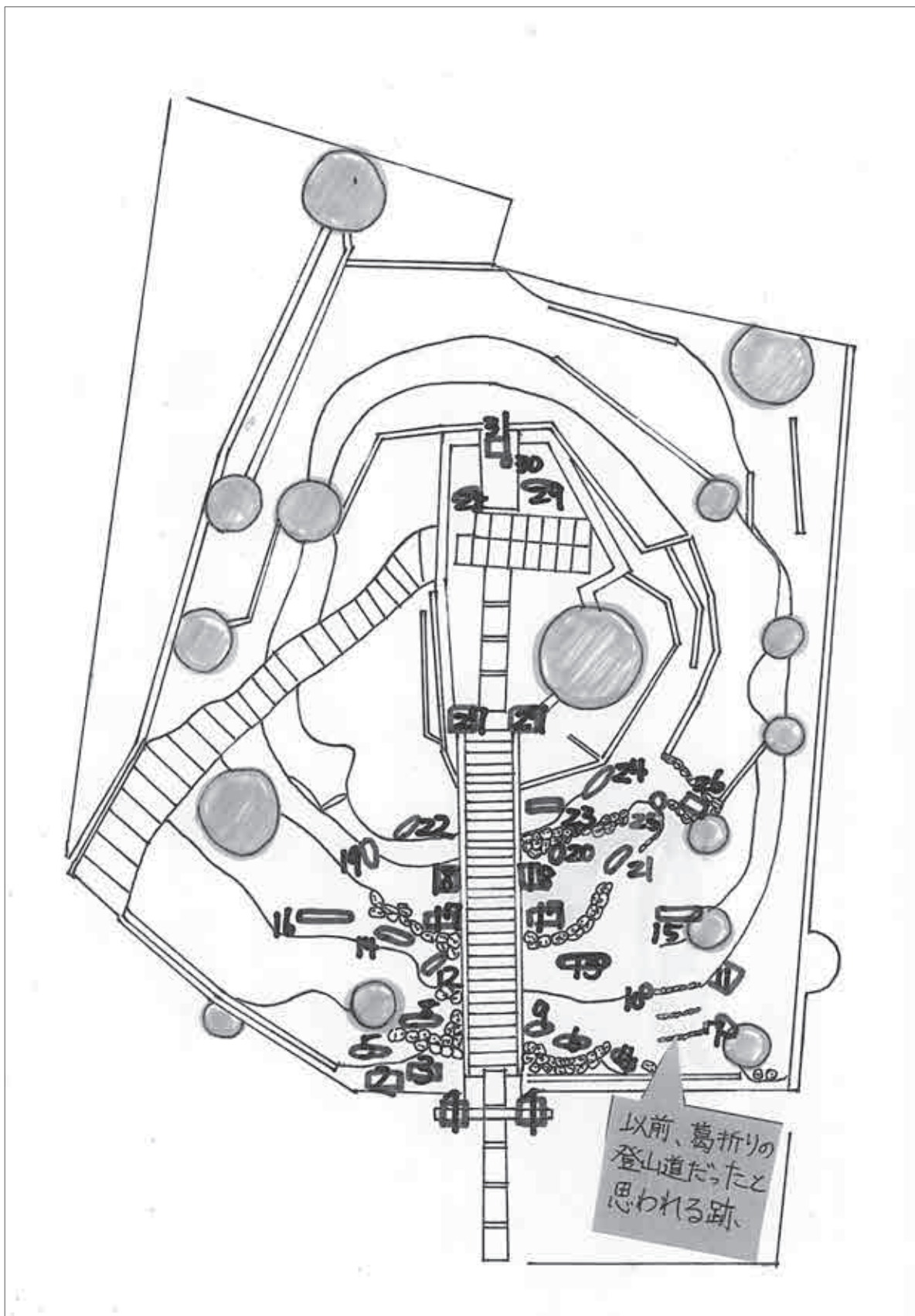


図 十条富士塚石造物等配置図

資料 1

1. 石造鳥居



2・3. 石造水盤



4. 丸喜講社記念碑



5. 伊藤講社記念碑



6. 伊藤元講申第三十九度記念碑



7. 村上講社記念碑



8. 富士登山三十三



9. 富士山遥拝所再建記念碑



10. 永田講社記念碑



11. 伊藤講社記念碑



12. 伊藤道行記念碑



13. 伊藤同行記念碑



14. 出羽三山神社供養塔



15. 富士登山三十三度成就記念碑



16. 伊藤元講創建三百後十年記念碑



17. 石造狛犬



18. 石造鳥居基礎



19. 伊藤講社記念碑



20. 烏帽子岩供養塔



21. 伊藤講社記念碑



22. 敬神講社記念碑



23. 伊藤同行供養塔



24. 大雄山永久元講記念碑



25. 小御嶽石尊大権現供養塔



26. 小御嶽大神石祠



27. 石造供養塔基礎



28. 伊藤講社記念碑



29. 伊藤元講記念碑



30. 供養塔



31. 富士・稻荷
大六天石祠



昔からの伝統行事、お正月について

板橋区立蓮根小学校5年 しまだ よう
島田 陽

わたしが調べようと思ったことは、お正月についてです。その中でも、お正月にはどんな習かんや意味、思いがあったのかなどを知りたいと思い、調べてみることにしました。

まず、最初にお正月についての疑問と予想です。それは、全部で五つあります。

一つ目の疑問は、お正月では、なぜ決まったかざりをかざっているのかです。それについての予想は、お正月にかざるかざりには、昔からの言い伝えや思い、意味があり、それを今も受けついで決まったかざりをかざっているのだと思います。

二つ目の疑問は、なぜお正月はこの日になったのかです。それについての予想は、昔も今も、数字の始めが一だから、1月1日が年の始まりのお正月になったのだと思います。

三つ目の疑問は、なぜお正月にお年玉がもらえるのかです。それについての予想は、大人の人たちが、今年も元気でがんばってねという思いがあって、大人の人たちは子どもたちにお年玉をくれるのだと思います。

四つ目の疑問は、お正月には、なぜ、おぞうにやおせちを食べる習かんがあるのかです。それについての予想は、おぞうにやおせちの中に入っているものは、縁起のいいものや、いろいろないい意味がこめられたものだから、年の始めのお正月に食べていると思います。

五つ目の疑問は、なぜ、着物を着ておまいりや初もうでに行っているのかです。それについての予想は、年の初めはきれいな格好をしていきたくて着物を着ておまいりや初もうでに行っている人が昔いて、それを今も受けついでいて、着物を着ておまいりや初もうでに行く人がいるのだと思います。

次に、五つの疑問についての調べて分かったことと、自分の予想はあったか、ちがっていたかです。

一つ目の予想はあたっていて、昔からの言い伝えなどを今も受けついでかざっていることが分かりました。くわしく調べて分かったことは、門松と鏡もちの言い伝えや意味です。まずは、門松です。門松は、神が宿る場所だと考えられていて、「神様をまつ」という意味があったそうです。次は、鏡もちです。お正月のかざりで有名な鏡もちは、丸くひらべったい鏡ににせて作ったおもちだから鏡もちといわれています。また、お正月には年神様におそなえしているそうです。鏡もちには、「年神様が宿ってどうか福が来ますように」という願いがこめられているともいわれています。

二つ目の予想はちがっていて、1月1日がお正月になったのは、1873年（明治6年）に太いん太陽れきから太陽れきに変わったからだそうです。くわしく調べて分かったことは、もともとの一年の始まりの季節です。一年の始まりの季節は、今は冬ですが、もともとは春だったそうです。ちなみに、お正月の「めでたい」という言葉は、昔の春が一年の始まりというところから来ているそうです。なぜなら、一年の始まりの春は、農作業も始まりの春で、農作物の「芽出たい」という言葉から来ているからだそうです。

三つ目の予想はちがっていて、お年玉をあげるのは、最初はお金じゃなく、おもちをあげる習かんで、子どもの成長をいのってあげるものだったからだそうです。くわしく調べて分かったことは、なぜおもちをあげる習かんがあったのか、それがなぜお金をあげる習かんに変わったのか、お年玉とは何なのかです。まず、おもちをあげる習かんがあったのかは、両親が独立した子どもにおもちをあげたのが始まりで、それをずっと受けついでいったそうです。次に、お金をあげる習かん

に変わったのかは、江戸時代に、店の主人が、そこで働く人にお金をあげたのが始まりで、それから、おもちではなくお金をあげる習かんに変わったそうです。最後に、お年玉とは何なのかは、お年玉は、新しい年をお祝いするおくりものことだったそうですが、もともとは、その年に初めて神様から与えられるものだといわれているそうです。

四つ目の予想はあたっていて、お正月におせちやおぞうにを食べる理由は、縁起のいいものが入っているからだそうです。くわしく調べて分かったことは、おぞうにとおせちの中に入っている縁起のいいものです。まずは、おぞうにの中に入っている縁起のいいものです。それはおもちです。なぜなら、おもちはお米でつくられていて、お米は、お祝い事などで食べる縁起物だからだそうです。次に、おせちの中に入っている縁起のいいものです。それはたくさんありますが、おばあちゃんに聞いた二つを紹介します。一つ目は、豆で、「マメになるように」という意味があり、二つ目は、かずのこで、「しそんはんえい」という意味があるそうです。また、おせち料理には、いつも忙しい主婦に、正月三が日休んでもらおうという意味もあります。

五つ目の予想は、ちがっていて、お正月に着物を着るのは、着衣始めというお正月にふさわしく着物を新調する習かんがあるからだそうです。くわしく調べて分かったことは、着物を着て会社に行くところもあるということです。お正月の仕事始めに着物を着る会社があるのは、着物を着ることは、伝統的で、運気のあがる縁起の良い習かんだといわれているからです。

最後に、感想とまとめです。

わたしは、お正月について調べて、知らなかったこと、おどろいたことがたくさんありました。着物を着て会社に行くところや、お正月になぜお年玉がもらえるのかなど知らなかったことを知ることができました。そして、お正月は、いろいろな意味、思いがあり、伝統的な行事だと分かりました。今後も、節分やひな祭り、こどもの日など、日本のいろいろな文化や行事に目を向けていきたいです。

蒸気機関車の昔と今

板橋区立蓮根小学校5年 ^{まつお}松尾 ^{こうた}幸汰

城北交通公園にあるD51形蒸気機関車は、とても古く見えます。そこで蒸気機関車について調べてみました。

D51形、通称デゴイチは昭和11年に製作が開始され、1115両作られました。日本の機関車の中で一番多く作られた、代表的な蒸気機関車で、とても力持ちなので貨物用として使われていましたが、勾配線区では旅客用にも使われました。

初期の95両は「ナメクジ形」と呼ばれる半流線形で、煙突、給水温め器、砂箱、蒸気ドームまでをひとつのカバーでおおっています。ナメクジ形は保守が大変なので、昭和13年からは、「標準形」という形になりました。城北交通公園にある蒸気機関車も標準形です。D51形の全長は、19.73メートル、重さは125.77トン、動輪の直径は1.4メートル、時速は85キロメートル、馬力は1300馬力です。

1000両以上作られて活やくした蒸気機関車がなぜ消えていったのか考えました。

まず、時間がかかることです。今、蒸気機関車が走っているばんえつ西線では、快速あがのは2時間13分で福島県の会津若松から新潟県の新津までを走ります。SLばんえつ物語号は同じ区間を3時間11分かけて走るので、1時間余計に時間がかかります。SLは、途中で水を補給するために停車する時間も必要です。

また、電化区域が増えたことで、電気機関車が使われるようになり、蒸気機関車が減ってしまったと考えられます。

さらに、蒸気機関車は煙突から煙を出して走るので、すすが出ます。すすは、周りの人たちがいやに思う原因となるため、都会で走ることはできません。だから減ったとみられます。

でも、今でも蒸気機関車は走っています。最近では、東武鉄道が蒸気機関車の運行を始めました。

ぼくは、ばんえつ西線と大井川鉄道の蒸気機関車に乗りに行ったことがあります。

ぼくはまず、人々はなぜSLに乗りに行くのかということを考えました。

ぼくの家族はSLに乗るために東京から福島や静岡に出かけています。それは、なかなか乗ることのできないSLに一度は乗ってみたいと思うからだと思いました。

SLに乗る前はわくわくして発車時間よりもずっと前からホームに行き、SLが来るのを待ちました。黒いけむりを出しながらSLがホームに入ってくるのを見て、大きくてカッコいいと思いました。SLが止まるとたくさんの人がSLの写真を撮っていました。

SLに乗ってみると、電車とは違うゆれ方をすることに気がつきました。発車するときや停車するときにはガクンとゆれるので、乗りごちが悪いと思いました。急に前後にゆれるので、機関車に引っ張られていることを感じました。

SLに乗っていると、SLが走るようすを見ている人がたくさんいることに気がつきました。写真をとっている人、SLに向かって手をふっている人が見えました。大井川鉄道でSLに乗っていた時には、ろてんぶろに入りながら手をふっている人がいてびっくりしました。SLを見るとうれしくなったり、幸福な気持ちになるのだと思います。

今、ばんえつ西線で走っているSLのばんえつ物語号に不具合があったため、修理中になっています。修理するために、部品を新しく作ることからしています。SLがなくなりかけていることを

止めないといけないというJR東日本の人の思いと、SLを残してほしい人の思いがあって行われているのだと思います。

古いものを残していくのは大変なことだと思いますが、これからも残して行って、昔のことを伝えて行ってほしいと思います。

ぼくは小さいときに城北交通公園の機関車が大好きで、よく運転席に入って遊んでいたそうです。これからもこのまま残していけるといいと思いました。

おついたちについて

板橋区立緑小学校4年 ^{つきい}月井 ^{りく}理久

ぼくの家では、毎月一日を「おついたち」といい朝ごはんにお赤飯を食べています。お母さんは食べる時に必ず、お父さんとぼくに、「今月も元気で仕事がんばってね。」や「今月もけがしないで楽しくね。」と言ってくれます。おじいちゃん、おばあちゃん家に行った時もおついたちにお赤飯が出されました。お母さんも小さいころから毎月お赤飯を食べていたそうです。そこで、「おついたちにはどんな意味があるの。」「なぜおついたちにお赤飯を食べるの。」と思い、その意味を、おじいちゃん、おばあちゃんに聞いてみました。

おばあちゃんは、「ぶじに新しい月をむかえられたことに対する感しゃの気持ちと、また一ヵ月家族みんなが元気にすごせますよというねがいをこめて食べるんだよ。」と教えてくれました。おじいちゃんは、「一ヵ月間ありがとう、そしてこれからもよろしくという意味だよ。」と教えてくれました。

次は、本で調べてみたり、お赤飯を売っている和菓子屋さんで話を聞いてみました。

昔は月の始めのことを「つきたち」とよんでいました。それが転じて「ついたち」とよばれるようになりました。さらに、「お」をつけて、ていねいに「おついたち」とよばれるようになったと言われています。おついたちは元旦と同じくらい大切な日です。今月もおついたちをむかえられたというよろこびと、この一ヵ月間うまくいきますよということでお赤飯が食べられていたそうです。そしてお赤飯は、日本では古くから赤い色には邪気をはらう力があると考えられていました。そしてお米が高級な食べ物であったことから、神様に赤米を炊いて供える習慣があったそうです。また、江戸時代では江戸病と言われるビタミンB1が不足でなる病気がありました。そこで、その江戸病を予防するために、お赤飯を食べていたそうです。また、調べていくうちに分かったことは、ついたちの朝神社へお参りする「おついたち参り」の習慣もあるそうです。無病息災や家内安全などをおいのりするそうです。ぼくはおついたちに神社にお参りしたことがないので、家族そろってお参りに行ってみたいです。

ぼくのおじいちゃんは、おついたちには、サカキとお赤飯を神様におそなえしています。そして、ぼくの家族のけんこうまでおいのりしてくれています。お母さんは、「また新しい一ヵ月をむかえられたよろこびに感しゃして、もち米やささげに思いをぎっしりつめて、これからもおいしいお赤飯を炊くからね。」と言ってくれたので、ぼくも感しゃして、いただきたいです。そして、古くから伝わってきたこの習慣をもっとたくさんの方の地いきに広めて、このおついたちを楽しみたいです。

サンシティのむかし

板橋区立緑小学校3年 ^{ないとう}内藤 ^{れいね}莉音

わたしは、学校のじゅぎょうで、さくら公園にむかしの家のあとがあるのをしったので、サンシティのむかしの調べようと思いました。サンシティにいるおばあちゃんから、

「サンシティはむかしあさひかせいだったよ。」

と聞きました。そこで、わたしは、公文書館と、はす根図書館で、むかしの地図を見たり、しりょうをかりて調べました。赤つかのきょう土しりょう館では、てんじ物を見てきました。

サンシティは、1974年けんせつかいしで、1980年しゅんこうしました。おばあちゃんは、「サンシティのマンションを買いに来た時、ぎょうれつにならんでちゅうせんをしたんだよ。」と言っていました。

1975年はっ行の東京都こうくうじゅうたく地図ちょうには、植生・ハイマツ地の記号が書いてありました。

1960年の東京都全じゅうたくあん内地図ちょうによると、あさひかせい東京工場とりょうがありました。このころ中台は、志村中台町という名前でした。志村中台町は、げんざいの、中台・相生町・若木一～三丁目・前野六丁目の地いきだったそうです。わたしは、中台と自分のすんでいる相生町がいっしょの町だったので、びっくりしました。志村中台町という名前だった期間は1932～70年でした。

大正14年の帝都地形図によると、サンシティは、東京ガス電気工ぎょうかぶしき会社でした。ほうけん広場にある、レンガの家のようなものは、むかし火薬こだったことがわかりました。

さくら公園では、土器・石器・鎌などの鉄器・土製勾玉などが出土しているようです。なら～へい安時代のたてあなじゅうきよのあとは三けんです。こふんじだいの初期の、たてあなじゅうきよのあとは、一けん、同じく、こふん時代後期に七、八けん、じょうもん時代の前期にも三けんたてあなじゅうきよがあったあとが、見つかっています。

中台はむさしの台地の北東にいちしています。中台という地名は志村じょうと西台の中間にあることからつけられた村の名前です。名前のおりきふくとんだ台地とわき水がある低地からなっています。ちなみに緑小の所には沼があったそうです。

15万年前サンシティは海でした。むさしの台地に入るいの生かつがはじまったのは、およそ3万年前だと考えられています。かが一丁目の東いたばし体育館前の地そうからは、ナウマンゾウの化石が発見されています。

むかしのことを調べるのはたいへんだったけれど、だんだんらくになりました。わたしが一番おどろいたのは、中台と自分のすんでいる相生町が同じ町だったことです。むかしのことを知ることができてうれしかったです。